小説　Tarota
挿絵　甘野　氷

プロローグ　006
第1章　入れ替わった二人　014
第2章　挙動不審者が多すぎる　062
第3章　僕がお姉さんの替わりなんて無理です　098
第4章　ズレ行く学園性活　136
第5章　淫魔からイきます！　160
エピローグ　196
あとがき　202

登場人物紹介

Characters

春日部　章（かすかべ　あきら）　…　平凡な性欲旺盛な少年

宮原　進（みやはら　すすむ）　…　可愛いらしい風貌で気弱な少年

桜井　南（さくらい　みなみ）　…　クラスのアイドル的存在

野田　清水（のだ　きよみ）　…　短髪で勝気な少女

上尾　麻伊（あげお　まい）　…　チャイナメガネポニテ♪の退魔師

上尾　恵奈（あげお　えな）　…　巫女さん退魔師

桶川　智樹（おけがわ　ともき）　…　退魔師の助手でスケベ野郎

プロローグ

ヘッドライトの強烈な光が深夜の山道を駆け抜けていく。疾走する車上に揺られるのは若い男女の二人組みだ。アップテンポな曲が作り出すノリと、舗装されていないが故の物理的な振動に揺られても、車内を流れる空気はイライラとムカムカが入り交ざったギスギスした負の感情に満ち溢れている。

「ちょっとぉ〜。まだ着かないのぉ〜」

重い空気の混合物が炸裂したかのように、女が不満の声を爆発させる。

「つるせぇなぁ…」

前方を見据えて掴んだハンドルを中指でノックして、男は不快感を発散させようとするのだが効果は思わしくない。

「もうちょっとで着くから待ってろよ…」

男の口から漏れる今夜幾度目かの言葉に最早効力などある訳もなく、むしろ女の喉にあると思わしき逆さ鱗に触れたようで、言葉の洪水が堰を切って流れ出す結果を招く。

「さっきもそう言ったじゃん。あ〜もう、今時ナビついてないなんて信じらんなーい。今すぐナビ付けて、ちゃっちゃと到着してよぉ〜。ねぇ〜。ナビナビナビナビぃ〜」

曲に合わせて歌うかのような大合唱に、この場に置き去りにしてやろうか、と男の中に黒い

感情が立ちこめるが何とか堪える。けれども黙るのも癪なので、替わりにこちらからも小言の一つを投げ返す。

「お前がちゃんと地図見て案内しねぇから迷ったんだろ……」

「だってぇ～解んないもん！女は地図を読めないって、そんな事も知らないのぉ～」

言葉の応酬で男に勝ち目なぞあろう筈も無い。身勝手な言動の数々に男の口の端がピクリと反射的に動き、声にならない呻きで抗議しながらヘッドライトが照らし出す視界の悪い山道のカーブにブレーキを踏み込む。軽い減速感と遠心力が身体を揺らし、それと同時にゴスン……と鈍い振動が車内を揺らした。

「やべっ……」

小声で呟き慌ててブレーキを更に踏むと、車は完全に停止した。

「ちょっとぉ～」

女の不安な声を背後に、男はダッシュボードから小型のライトを掴むと、「見てくる…」そう言い残して車外へと降り立った。明滅するブレーキランプの赤い光が照らす範囲では様子を確認する事は出来ない。先端を捻りライトを点灯させて探りを入れるが、それでもよく解らない。

溜息を一つ吐き出し、ゆっくりと歩き出していく。紅葉を迎えた頃の夜山は肌寒く、男の背筋にブルリと冷たいものを駆け巡らせた。

小型ライトの灯りを左右に振りながら、幾許かの距離を進んでいくと、接触原因と思しき物体が闇から浮かび上がってきた。山道の路肩に木造の小さな建物があり、そこに折れた木の立て札が突き刺さっていたのだ。どうやら、ぶつかったのは立て看板のようで、人では無かったから一安心だ。

それにしても……男は一息つくと改めて自分の引き起こした事故現場を検証した。まず、ぶつかった立て札は根元付近からポキリと折れていて、倒れた先には岩の上に鎮座した小さな祠があり扉部分にめり込んでいる。

被害は二つの建造物だけのようだが……再建費用などを払わされるのだろうか？

「バックレちまった方が良さそうだよな……」

こんな古めかしい物に価値など見出せないが、実は凄い代物だったりしたら困る。だから気付かなかったフリをして、さっさと逃げ出せば良いのだが、何となく祠そのものに興味が沸いていた。一体、何故こんな所にあって、何を奉っているのか……普段ならば絶対に感じないであろう知的好奇心に駆られて男は祠へと近づいて行く。

腰を屈めて無造作に刺さった立て札を抜き去り、壊れた扉を慎重に開く。中から現れたのは拳大の石が一つ、闇夜にも関わらずボウっと光を放っているようにも見える。ライトの灯りが反射しているだけだろうと気のせいにして、芽生えた好奇心が更なる行動に駆り立てた。

腕を伸ばして中の石を取り出す。ズシリと重い手応えに驚き、貼られた札にぎょっとする。

えらく達筆な字ながらも『封印』と読み取る事ができ、全体の雰囲気からも只モノでは無い事が推察され、何で取り出してしまったのかと自問しながら戻そうとする。

その時突然に、ムカツキが胸の奥から込み上げて来た。ここに到着するまでに累積されていた負の感情が一気に蘇り、怒りが頭の中に充満して脈動が大きくなり自制が利かないままに腕を動かしていた。ついカっとなって……そう表現するしか無いように、男は石に貼られた札を剥がし取ったのだ。

強い接着力が残っていたのだろうか、全てが剥がされた訳ではなく『印』の字の部分が残っていたが、それでも破れたという事実には変わりない。

「うふふふ……」

夜風に乗って女の笑い声が聞こえた気がした。その瞬間に、男のムカツキが嘘のように収まった。しかし幻聴と怒りの感情を生んだ女性の声とが重なったように思えて、つい握っていた石を遠くに放り投げた。石はみるみる内に闇へと溶け込み、ようやく落ち着いた男は、やらかしてしまった行為から逃れるように足早にその場を立ち去る。

「どうだったの？」

ようやく戻ってきた男に、暇を弄んでいた女が眠気を噛み殺して訊ねる。流石に状況が状況なので、声色にはやや不安な色合いが滲み出ていた。

「いや、人を跳ねたとか、そういうんじゃないから安心していいぜ……」

言葉とは裏腹に、慌てている様子が伺える。女は不安の色を察知しながらも、特に何も言わず男の行動を見守った。男は兎に角も車を発進させようとするのだが、エンジンが反応すれども何故か進まない。

「なんだ…おい…」

何度かトライしてみるものの、一向に車が動く気配は見られない。車内灯もヘッドライトも付いているし、バッテリーが上がった訳では無いだろう。エンジン音は正常なように聞こえるし、ぶつかったのもあんな木で出来た代物だから衝突による故障とも考え難い。とはいえ、何かの拍子にどこかがイカレタ事だけは確かなようだ。

「どうすんのよ…」

明らかに不満な声だが、流石に状況からかそれを爆発させるような事は無いようだ。

「しょうがねぇよ…ロードサービスに電話して救援待ちだな…」

携帯を取り出して、電話帳の中から緊急時の為に登録しておいた番号にかける。短い電子音が数回鳴った後に芳しくない結果が返ってきた。

「圏外だってよ……」

「えーどうすんの？」

「しょうがねぇだろ…」

そのとき、フロントガラスの向こうに、ボンヤリと浮かび上がる女性の姿が見えた。空中に

浮かんでいる女性はボンテージのような際どい衣装で、大きく開いた胸元から豊かな乳房を覗かせては男を誘っているようだ。よく見れば蝙蝠に似た翼が背中から生えていて、先端の尖った細長い尻尾まであるではないか……。異様な幻覚に、男は目を擦りながらも悲しい性からゴクリと喉が鳴っていた。

「あら?今の人間のイメージはこんななのね…」

幻覚の女性からそんな呟きが聞こえたような気がして、いよいよ本格的に脳までイカレタのかと頭を振る。すると、嘘のように幻覚は消えていた。

やはり、疲れていただけなのか…と胸を撫で下ろした瞬間、隣に座る女から甘い囁き声が漏れ出した。

「ねぇ～助けも来ないし…このまま朝までしっぽりしない?」

豹変した態度に尻込みすると、身を乗り出した女が官能的な動きで体を密着させてくる。そんな彼女の目は赤く怪しい輝きを放っていた。

深夜の山中に男の悲鳴が響き渡った。

夕暮れも近い山道をジャージ姿の女性が重そうに荷物を抱えて歩いている。持ち運ぶ木箱の中に入っているのは石ころで、何故かそれぞれに『目印』と書かれた紙が貼ってある。がちゃ

がちゃと、石達が奏でる打撃音は軽快なのだが、運んでいる人物には不快に感じるらしく、いつしか怨嗟の声が口の端から漏れ出していた。

「まったくぅ～。どうして、アタシがこんな重たいの運ばなくちゃならないのよぉ～」

彼女が一生懸命に運んでいるのはイベントで使う小道具であり、その実行委員という役職に就いているのだから準備作業に労力を割くのは当然である。けれどもこういう肉体労働は男子の分担なのでは？そんな疑問が持ち上がってしまうのも仕方がない事であろう。

しかし、たまたま手が開いた状態でブラついていて、丁度周りに男子がおらず振れる人間も居なかったので彼女にお鉢が回ってきてしまったのだ。とはいえ運ぶのは最終便なので一番軽いのが救いだ。

「だからってさぁ…こんなの持ち運んでいたら、ただでさえ太い二の腕が益々……」

乙女の悩みに気を取られているのが災いし、彼女の脚が窪みに取られて縺れる。体勢を立て直そうしたものの、荷物の重量が関係してバランスを崩してしまい、転げて箱の中身を大層ぶちまけていた。

「痛たた……もう最悪ぅ～」

立ち上がって埃を払い、散らばった石を拾い集めていく。薄暗い木漏れ日が背中を照らすのが侘しい気分にさせて、転倒した痛みも手伝って彼女の瞳に薄っすらと涙が浮かんでいた。

「ああ、もう！」

乱暴に石を投げ入れていき、全て集まっただろうと辺りを再度見渡すと、浮かんだ涙に反射するように光る物体が目に映った。それは草むらの中に沈んだ一個の石だ。これも散らばった仲間なのであろうか？手にとってみればズシリと重く、表面には破けた紙が貼られている。

「やばっ…破れちゃったよ…」

確認してみれば達筆な文字で『印』と読み取れるが、明らかに他のとは書体が違う。

「けど……まぁいいか。書道の先生に頼んだのもあるんだよね……きっと」

彼女は納得すると箱の中へと放り投げ、それらを抱えて夕暮れの道を再び歩き始めていた。

これが事件を巻き起こすキッカケになるとは知らずに……。

第1章：入れ替わった二人

組み分けというものは非常に重要な分岐点であり、これ一つで今後の人生を左右する力を有しているのは間違いない。だからこそ、幸運というものが一定量しか存在しないとしたら、その大部分を消費する覚悟で望まねばならないのだ！

そんな信念を持って抽選箱に向かおうというのは、春日部　章（かすかべ　あきら）という平凡な様相に凡庸な成績という、どこにでも転がっていそうな一介の青少年である。彼がそこまで意気込んで望もうとしているのは、今現在行われている林間学校の特別イベント……肝試しのペアを決めるクジ引きについてだ。

女の子と合法的に二人っきりになれるチャンスとあらば、その相手が誰になるかは若い男として重要な意義があるのは当然だ。勿論、章にとって最重要攻略目標はある。同じクラスの桜井　南（さくらい　みなみ）ちゃんだ。可愛く清楚で明るく……しかも結構なプロポーションで……それだけ揃っていたら学年内でも人気高い。それゆえに、一枚しかないドリームチケットの倍率は凄まじく、当てるのに必要な運の消費量も多いに違いない。

仮に外れたとしても少しでも可愛い女の子とペアになりたいと願うのは世の常というヤツだろう。

だからこそ……気合一閃！

章は全神経を集中させて当たりを掴むべく、抽選箱という運命の大海を掻き分けていた。そうして選択した一枚の紙片を、恭しくも頭上に掲げて拝命し大事に手元で保管する。全員が引き終わってから一斉に開いてペアが確定するという訳だから、勿論その間も紙片に念を送るのを絶やさない。

そうして各員が思いを込めた紙片を引き当てた所で、ハンドスピーカーを片手にした教員が話を始めた。聴衆の耳はそれを受け流す事に専念し、早く開けさせろという念に満ち溢れている。短くも長く感じる話が終ると、いいよいよクジを開く瞬間が訪れる。

「２３番！」

章は紙片の数字をつい大声で叫んでしまう。対応する番号は一体、誰なんだ？期待と興奮だけを胸に辺りを見回す。しかし周囲には居ないようで、すぐに名乗り出る声は聞こえてこない。

「２３番の娘…いる～？」

あちこちで飛び交う番号に負けじと声を張り上げて、歩きながら素早く目を走らせる。すると……人混みの中に埋もれて一生懸命に上がる細い指に握られた紙片が目に止まる。

「２３番！」

嬉しい声で読み上げて、颯爽とその手の下に歩み寄っていく。浴衣の袖から覗く細くて白い腕の持ち主に、否が応でも期待は高まってしまう。

「は……はい、２３番です。よろしくお願いしますぅ」

可愛らしい声が凍りついた。章も口を半開きのまま言葉を失っている。
「ちょっと…やだ…嘘ぉ～」
甘ったるい空気を纏わりつかせていた女の子の声は一気にトーンダウンして、不平不満の滲んだ音へと変化する。
「２３番ってアンタなの？」
章は不承不承に紙片を抓み上げて相手に見せつけた。
「すいませーん。チェンジお願いできますかー」
誰に向かってという訳でも無いだろうが、女がそっぽに向かって叫ぶ。
「それはこっちのセリフだよ……選りにも選って、お前が相手とはな！」
章は改めて相手を見た。同じクラスの女子で不倶戴天の敵と呼ぶべき、野田　清水（のだきよみ）という女の顔を。
短い髪に気の強そうな瞳、何かというと悪口を吹き込む為に存在している口、それに浴衣がやけに似合うような魅力的ではないプロポーションといい、章の好みではない部品で構成されている。
一方の清水から見た場合も、エロい事しか考えず目線が女を部品として捉えて値踏みするような章は大嫌いな存在であった。外見的にも好きな部類では無いのだし。
「なぁ…」

「なによ…」

「二人が嫌だって言ったらペア解消が認められるんじゃね？」

章が提出した議題は両院を通過するのに時間が掛かる訳もない。

「何言ってるんだ……お前らは……こういう事が起きないよう、あれだけ注意しただろう！」

決裁を求める為に押しかけた、イベント最高責任者であるところの担任の口から漏れたのは、予想に反して却下の言葉であった。

「えー！でも、本当に勘弁して欲しいんすよねぇ……このペアだけは……」

後ろの方で清水も仕切りに頷いている。

「駄目だ…駄目！あんまり駄々を捏ねると内申書に重大なペナルティが科せられるぞ……。言っておくがこれを理由にイベントを放棄してもだからな！」

二人並んで不機嫌なオーラを撒き散らしながら退却していると、前方から全く正反対の幸せなオーラが放出されているのに気がついた。満面という言葉はこういう時に用いるのだという見本を体現している男の顔は、二人にとって見覚えのあるクラスメイトのものであった。

「宮っち、じゃねぇか……なんだあのあからさまに幸せそうな顔は……」

「一緒にいるの……南よ！」

「なぬぅ！？」

章は足早に幸せ顔へと突撃した。挨拶もそこそこに、にやけた顔をグリグリとしながら横目

で相手の顔を確認する。確かに章が第一目標と定めていた桜井　南の麗しい姿に他ならない。
「宮っちぃ…まさか……お前ぇ……」
「そのぉ～。当たっちゃいました……」
相当な力で引っ張られているのにも関わらず、目の端が幸せそうに歪んだままだ。宮っちと呼ばれているクラスメイトにとって、祝福のエール位にしか感じていないのであろう。
「宮っち……いや、宮原君。折り入ってお願いがあります」
「譲れって言うんでしょ……嫌だよぉ～。こればっかりは絶対に駄目！」
宮原と呼ばれたクラスメイトから飛び出すのは、当然の如く否定の言葉だ。
「頼むよ…本当…俺の相手、アイツなんだよ……」
章の指差す方向を辿っていけば、桜井さんと何やら話しこんでいる浴衣少女の背中にぶち当たる。いつもと違う格好だとは言え宮原にも見覚えがあるし事情も良く解っている。
「野田さんかぁ……春日部君にとっては災難だねぇ～」
「だろぉ…。けど、お前にとっては別に嫌ってるって訳でも無いだろう？どうだい兄弟。ここは一つ助け合いの精神を発揮してだなぁ……俺の番号と取り替えちゃあ～、くれぇねぇ～かい？」
時代劇めいた言い回しでも、返ってくる答えが変わる筈も無い。
「じゃあ…幾ら？幾ら出せばいいのさ！」

金額の問題では勿論無い訳で、交渉が成立する余地など存在しない。

「っくぅ～、じゃあさぁ、せめてドリームチケットをチラっとだけでも拝ませてよ！」

必死に頼み込まれて、大事な宝物を人目に触れさせてしまうのが宮原の人の良さであり欠点だ。ジャージのポケットから取り出された紙片を、章は奪う算段ばかりを考えている。そうして画策された手段である処の一つを用いて、まんまと紙片をすり替えてしまったのだ。

「ああ～」

悲痛な叫びが人混みの中へと消えていく。

「お前にはその番号がお似合いだぜ！」

捨て台詞を残して、章は人混みに紛れて足早に逃げていく。宮原が必死に追いかけるも捕まえるのは困難だ。

「次！18番！おい、居ないのか！？」

肝試しのスタート地点から聞こえてくるハンドスピーカーの声に、章は夢のチケットを片手に滑り込んでいく。待たせているであろう、麗しの姫の下に馳せ参じるナイトのように優雅で果敢な足取りで踊り出て……その場で立ちすくんだ。

「よし、揃ったな。ほれ懐中電灯持って……。お前らはコースAだから間違えるなよ！」

教師の言葉も半分しか耳に入っていない。何故ならば待っていた筈の姫が……思っていたのと違うからだ。

「何でまたあんたなのよ！」
姫の声も不満そうだ。駆けつけた騎士が違っていたからに他ならない。
「何をモタモタしているんだ！後がつかえるから行きなさい！」
急かす教師の声に章は大声で「違うんです」と言っていた。
「何が違うんだ？」
「俺……本当は２３番なんです！」
教師は章の持っている紙片を確かめた。
「１８番じゃないか……」
「け…けど…こいつの番号は……」
姫と思っていた女性を指差す。教師は溜息一つ漏らしてから「さっき確かめたが１８番だったぞ」と死刑宣告に等しい言葉を吐いた。
「いいから行きなさい！」
渋々といった感じに二人は歩き出す。春日部　章と並んで歩くのは、野田　清水の気落ちした姿だ。つまり、二人とも同じように回避しようと友人の番号を奪う或いは交換した訳で、同一状況下に於ける行動が一緒というのは、本当は相性がばっちりなんじゃないかと他人が見れば思うであろう。
けれども当人達にとっては、それも面白くない出来事の一環であり、ついついグチグチと呟

きながらの道程になっている。

「もう最悪ぅ～」

「こっちのセリフだよ…近寄んなよ！」

「あんたが灯りを持ってんだから、しょうがないでしょ！」

こんな感じに暗い山道を抜けて、石段を登り古い神社の境内へと進む。暗闇の中で細い灯りに浮かび上がるのは、壊れかけた石灯籠や何時のものだか解らない絵馬掛けに狛犬替わりの稲荷などで、寂しげな光景は郷愁と共に心の闇を浮かび上がらせて、そこはかとない恐怖を生み出したりするものである。しかし、不満という強い感情に支配された二人には情緒的で繊細な恐怖は伝わり難く、サクサクと通過されるだけであった。

「ここがチェックポイントみたいね……」

壊れた賽銭箱の向こうに積まれた、目印という張り紙がある石の中から一個を清水は無造作に掴み取った。

「重ぉ～」

見た目よりも意外とある重量感に音を上げながら、清水は章にそれを押し付けた。返ってくるのは当然、「何で俺が…」という不平不満だ。

「浴衣だから仕舞う所なんて無いし、それに力仕事は男の役目でしょ？」

不承不承ながらも受け取ると、章は石をジャージのポケットへと放り込んだ。けれど嫌味の

一つでも返さずにはおけない。

「しかしお前って本当に怖がらねぇよなぁ……そんなに可愛気が無いんじゃ、女としてマズイんじゃねぇの？」

カチンという音が物理的に聞こえてきそうな反発を招く事は必定であろう。

「何よ！あたしだって素敵な男性とペアになってたら『きゃぁあ～怖いぃぃ』とか言って、わざと寄りかかってやろうとか計画してたのよ！それなのに……あ～あ台無し！」

清水はクルリと明後日の方を向いてしまった。だから章の目の前には、浴衣から覗く白いうなじが、懐中電灯の頼りなげな明かりで、闇の中にボンヤリと浮かび上がって見える。それに、一瞬見えた膨れっ面の意外な可愛さも思い出されて、章の喉は自然と鳴っていた。当然の事ながら、その刺激は下半身に直結して、性的な興奮現象となって現れる。こんなヤツに勃起させられちまったという反抗心が、次の軽口となって飛び出す。

「その為にワザワザ風呂に入って浴衣のままで参加したのかよ？」

「悪い？」

剥れた様子がこれまた可愛らしく見えてドギマギしてしまい、同時に膨張率も上昇カーブを描いていく。堪え難い性欲の暴走を抑えようとするが、もう辛抱も限界突破寸前で、それでも何とか卑屈になりたくないプライドから少々オドケタ声色で「もう……お前でいいかな……」そんな風にからかい半分に言っていた。

「はぁ？」
いきなりの発言に清水は怪訝な表情で振り返る。そして、発情している男の逆上せ顔と出会って、顔が引き攣り一歩後ずさりをした。しかし、動き始めた暴走の歯車というものはブレーキが壊れているのが常なので、章の行動も唐突に加速して止まらない。
「ちょっとこっち来いって…」
強引に肩を抱いてグイグイと男の力で押して行く。
「な…何よ……」
只ならぬ様子に危機感を憶えながらも下手に抵抗せず、清水の脚も連れられて動いていく。境内の裏手へ回って木立の間を少し進み、章は適当な一本の樹木に女を押さえつけた。
迫られた方は明らかな危機に動揺しながらも、ここまで黙ってついて来てしまったからには出方を伺うしかない。
「俺さぁ…この林間学校で捨てる気マンマンだったんだよねぇ…」
語り始めた言葉に「何を？」と問い返すしかない。
「ドーテーだよドーテー。お前だって処女捨てる気じゃなかったのか？そんな風に女の色気出そうと自前の浴衣まで持ち出してさ……」
勝手な理屈に流石に腹が立ってきて、清水は口を荒立てる。
「馬鹿じゃないの？だからあんたってサイテーよね！女にモテなくて当たり前よ！」

章は突き刺さる言葉の剣に臆さずに、暴れて逃れようとする獲物に密着して押さえつけていると、柔らかな中身の感触と芳しい石鹸の香りが鼻腔を擽られて、どうしようもなく性欲が刺激された。

太腿に膨張する男の欲望を感じて、清水も流石に怯えていたが弱みを見せまいとして何とか虎口を逃れる術を探っていた。耳元に男の獣めいた匂いを纏った息が吹きかかる。

「なぁ……いいだろう?ここまで来たらさぁ……大丈夫だって心配すんなよ……ゴムだって持ってきてるしさぁ……」

証拠を見せるべく、章はポケットを弄った。手の先に硬く大きな物体が触れる。

やべ……慌てて石を入れたからゴムがすぐに取り出せねぇよ……まずは石を掴んで……

押さえ込む力が緩んだ隙を清水が見逃す筈も無い。ドンと力一杯に押し出して抜け出し、頬の一つでも叩いてやる!気の強い彼女はそんな目論見を思い浮かべて即座に実行に移した。

突き飛ばされてフラフラとした瞬間、章は無我夢中でポケットを弄っているのと反対の手でバランスを保とうとして何かにしがみついた。それは平手打ちを咬ませようと繰り出した清水の右手であり、いきなり引っ張られては彼女もバランスを崩さざるをえず……

結果として、二人はもつれ合ったまま、木立の間のわずかな斜面を転がっていた。

世界が回転し、衝撃が身体を駆け巡る。

ブレーカーが落ちた刹那のように、ブラウン管が消える一瞬のように、意識がプツリと途切

れて視界にノイズが走った気がした。
秋風が木立を揺らす静かな葉音に揺さぶられ、二人の意識が目覚めるとフラフラと立ち上がる。そして何か悪い感覚に気がついた。
章が感じたのは、何となく軽くフワリとした感覚と衣擦れが身体を擦る感触だった。ふと見れば細い手首が浴衣から伸びている。どれも自分の視界から、自分の物として認識していた物ではない。
清水が感じるのは、力強く堅い身体の感覚と腰の辺りで衣服が引っ張られる重みだった。視線を下げればいつの間にか来ているのはジャージで、膨らんだポケットには硬い石が入っている。そして、より悪い知らせは股間に感じる、熱い滾りを伴ったツッパリだった。ズボンのその部分は明らかに出っ張っている。
二人は、ほぼ同時に自らの身体を弄っていた。今までとは明らかに違う感触と、身体からの返される被触感に驚きと困惑が入り乱れて……これまた同時に驚きの声を張り上げていた。
足早に肝試しの帰り道を急ぐ二人組みがいた。すれ違い様に耳を欹ててみれば、口々にブツブツと「これは夢、これは夢」とか「嘘よ嘘…うそ…」等の念仏が聞こえる。
章と清水の二人は己が身に起きた出来事が信じられずに、明るい場所に出ればこの異常なマヤカシも消し去ってくれるに違いない……そんな一縷の望みに縋りながら、帰路を急いでいる

のであった。

けれども歩く感覚だけでもいつもとの違いは明白で、その上、肝心の明るい場所に出てもマヤカシが真実であると解るだけだ。薄暗い木立の中で確認した、自分が目の前に立っているという不思議な感覚と、視界に入る所有している肉体の違いとが確定情報となっただけである。

「何よコレぇ〜」

清水の口から上がる声は今までと違った低音で、自分で聴いても不快だし周りで聴いても口調と声があっていないから気持ち悪い。

「そんな情けない声を出すなよ、俺の姿してんだからさぁ」

堪りかねて横の聴衆から抗議の声が上がる。腰に手を当てて、浴衣なのに脚を開いた仁王立ちだ。その姿を見て逆にクレームの声が上がる。

「あんたこそ…アタシの姿なんだから…脚閉じて、おしとやかにしてよ!」

「お前、別にそんなんじゃねぇだろ!」

そんな風に二人が騒いでいるのは流石に目立ったようで、巡回していた担任の目に止まり。

「こらこら、またお前達は揉めてるのか?ちゃんと行ってきたんだろうな?」

無言で頷く二人に担任は証拠の提出を求めた。章がポケットを弄ろうとして手を伸ばして気がつき、肘で清水を小突く。その合図でジャージから石が取り出されて、ようやく重みから開放された。

「ん？なんだこれ……印の一部が剥がれてるぞ。まぁいい、早く自分の部屋に戻りなさい！」

教師の残したセリフの最後の部分が二人に圧し掛かる。自分の部屋？自分といっても身体は自分のものじゃないから……

そこまで思考が回った時、章は素早く自分の胸に手を当てていた。そこにあるのは何度か確認したが、小振りながらも柔らかな感触であり、男には存在しない肉体の部位だ。アソコに触れる喪失感は寂しいものがあるのだが、間違い無く女の肉体である証拠に他ならない。だから、自分が帰るべきなのは女子の部屋となる訳で、色々な妄想が渦巻いてクラクラしてしまう。

「へへ……なぁ…ほら。先生もああ言ってるし、それぞれの部屋に帰ろうぜ！」

胸やアソコやらを触りながら、ギラついた目でニヤニヤと喋る姿は、持ち主に考えをすぐに見抜かれるのは当然だろう。

「勝手に触らないで！それと……このままなんて嫌よ！」

「そうは言ったって、どうすりゃ元に戻るんだよ？」

肉体が入れ替わっている。そんな非常識な事態が現実だ。では、そうなった原因は？と思い返すまでもなく、どう考えてもあの転倒が原因だ。

「とにかく！もう一回、二人で転げてみましょ！」

「えー！？いいじゃん。ちょっと位はこのままでも……」

「いいから！」

先程とは逆に清水が章を引き連れて、木立の並ぶ暗がりへと向かう。身体的には同じ構図なので連れ回すのは楽に出来た。それがお互いに今の肉体を意識させて、複雑な心境を助長させた。

「ここらでいいわよね！」

突然に立ち止まり、自分の身体を抱きしめて、清水は元に戻れと願いながら力任せに押し倒して転げる。痛みが身体を駆け巡るが、あの時みたいな意識が途切れる感覚は無い。それでも望みを託して目を瞑っては開いて、変わらぬ現実に絶望する。

「何でよもぅ～」

地面に座ったまま清水は途方に暮れる。章の方も戻りたい思いはゼロではなかったが、少し位の間ならばアレコレと楽しんでみたい邪念が強かったから、戻らなくても良かった訳で気楽な声で呼びかける。

「ま……しょうがねぇだろ。暫く互いの立場を替えて様子をみるしかないぜ！案外、朝目が覚めたら戻ってたりするかもよ？」

異論を挟もうにも、どうする事も出来ない。仕方なく当座に必要な情報の交換と、振る舞い方の諸注意を話し合って別れた。

章はドキドキと高鳴る胸を抱えて女子部屋の扉を開いた。中から聞こえる黄色い声の渦が脳に沁みこんで鼓動を更に高める。

「あ…キヨミ…ようやく帰ってきたの？」

「カスケベとペアだったんだって？災難だったわね……」

「変な事されなかった？」

襖を開いて一歩を踏み出した瞬間に、布団に寝転がるクラスメイトから口々に言葉を浴びせられた。それも内容を吟味するまでもなく、章に関する悪い風評だ。

何だよ『カスケベ』っていう呼称は！俺はそんな不名誉な渾名で呼ばれているのか？

章は顔を引き攣らせながら、何とか印象を変えてやろうと返答を思案する。それは、いつもの野田清水の様子と明らかに違っていて、室内にいる全員の注目を集めた。

「あれ？浴衣が汚れてるじゃん。どうしたの？やっぱり押し倒されたの？カスケベに！」

鋭い指摘に章は一瞬息を飲み込みながらも、章は思案した内容を女性らしい言葉遣いに置き換えて口に出した。

「べ…別に…春日部君はそんな事しない……わよ。彼はとっとも紳士的にワタシを優しくエスコートしてくれたのよぉ。本当に素敵な人なんだからぁ～」

今までとは余りに違いすぎる発言と口調に、その場の空気が一気に凍りついた。章も流石にやり過ぎたと感じたのか、慌てて蛇足の言葉で補完する。

「えと……帰りに……すっころんで頭打ったから、何か調子悪いみたい。けど……浴衣汚れちゃったし、とりあえず風呂に行ってくるねー」

素早く辺りを見回してタオルと旅館に備え付けの浴衣を掴み取り、足早に部屋を後にした。残されたクラスメイト達の間で様々な憶測が飛び交ったのは言うまでもないだろう。

心の中で冷や汗をかきながら章は廊下を歩いていた。やべぇ失敗したなぁ……と思う反面、まぁアイツの評判だしいっかな……とすぐに開き直る。

それよりも今の関心事は目的地であって、思い浮かべるだけでクラっと倒れてしまいそうになる。何せ向かう先は全男子が想いを馳せる禁断の地である女風呂なのだ。今や章はそんな楽園へと堂々と入国出来るパスポートを手に入れた訳だ。

再び胸を高鳴らせて、普段と違う色の暖簾を潜る。数歩の道程を歩けば、そこには第一の天国である脱衣場が待ち構えていた。

これから風呂へと入ろうかという女子生徒の衣擦れの音が間近で聞こえたかと思えば、バスタオルを巻きつけただけの姿でドライヤーを手に濡れ髪と闘う姿が目に入り、更には浴室から今上がったばかりで無防備に揺らせた胸から滴り落ちる水滴までもが網膜に飛び込んでくる。余りにも美味しすぎる情報の数々は膨大な上に質も高く、この場で失神してしまうのではと思える程の衝撃を章の精神に与えていた。

いつまでも眺めていたかったが、不審そうに問いかける視線が多くなってきたし、ここはま

だ天国への入り口にしか過ぎないと思い出して、空いているカゴを探す。着替えとタオルを置いたら帯を解こうとして……背中に手を回してから意外と複雑な結び方になっている事に戸惑った。何とか外すと締め付けからの開放感が気持ち良い。

帯と浴衣を乱雑にカゴへと放り込み、残るのは下着の二点だ。章は見覚えの無いスリップを不思議そうに抓み、被っているだけだと気付いて脱ぎ去った。薄い生地が肌を滑る衣擦れの感覚を楽しみ、微かに動く胸の脂肪にドキドキする。章は裸になった自分の胸を早速に見下ろして、他人の所有物だという事実にも遠慮せずに指先で小突いた。

「おほぉ～」

反射的に口から声が漏れてしまい、周囲から再び視線が集中する。章は慌てて指を離すと、口に手を当てて「何でも無いですわよ……」などと呟いてから、視線が逸れるのを見計らって再び柔らかさを確かめる為に両手で胸を掬う。もにゅっとした弾力としっとりした肌の感触が掌に吸い付き、楽しい揉み心地に夢中で二度三度と弄った。

（こ…これ程のものとはなぁ…すげーよ…おっぱい！）

暫く弄っていたかったが、こんな公の場でするのは流石にまずいだろう。章は名残惜しくも手を離すと清水の大事な部分を守る最後の砦の攻略に着手した。伸びるパンツをスルスルと脱がすと手元で小さく纏まる。脱ぎたてホヤホヤの女子の下着を前に、章は気持ちを抑えきれずに背中を小さく丸めて匂いをそっと嗅いでみた。